《翻　訳》

# イタロ・カルヴィーノ『ある日の午後，アダムが』(*)（解題と試訳）

尾　河　直　哉

## 解題

以下に日本語の試訳を掲げるイタロ・カルヴィーノの短編小説「ある日の午後，アダムが」(1)は，初め『最後に烏がやってくる」(2)に収録され，後に『短編集』第一部「むずかしい牧歌」(3)に収録された，カルヴィーノの最も初期に属する作品である。

この短編を読み解く鍵はタイトルの中に在る。アダムという名前の人物が作品中に登場しないからだ。タイトルはこの作品を旧約聖書のエデンの園におけるアダムとイヴの物語に重ねて読むように暗示しているのである。したがって，少年庭師リベレーゾにはアダムを，少女の家政婦マリア＝ヌンツィアータにはイヴを重ねて読まなければならない。リベレーゾがプレゼントしようとマリア＝ヌンツィアータに次々差し出す小動物は，エデンの園における誘惑の寓意を構成することになるだろう。しかし，この庭で誘惑はけっして「堕落」への道としては描かれていないことに注目したい。むしろ，生殖を通して新しい生命の再生に向かう志向性すら感じられないだろうか。つまり，この庭＝園は裏返されたエデンの園なのだ。とはいえ，小動物に触れるよう誘いをかける（接触＝toccataの主題）少年＝アダムにたいし，少女＝イヴは接触に隠された性的メッセージにたじろぎ小動物から逃げようとする（遁走＝fugaの主題）。少年の好意に執着しながらも，最後まで接触へと踏み切ることができない少女の姿に，生殖＝再生へと通じる道のりの困難さが示されている。さらに，「新しい庭師」という表現や彼の風貌から，リベレーゾにはアダムのみならず，イエス・キリストのイメージを看取できることを考え併せるなら，エデンの園と救世主の姿をファシズムから解き放たれてまもないイタリアに重ねることによって，新生イタリアが古い社会から解放され，新しい人間の生殖＝再生へと向かうことへの期待とそこに予感されるその困難を寓意的に描いているいるとも考えられるだろう。

牧歌風恋愛小説の型を踏襲し，その清らかさを保ちながらも，それをアイロニカルかつグロテスクにねじ曲げる筆致には，自由，解放，新生をただ美しく讃えるだけ賛歌には終わらせず，同時にその困難をも示そうとするカルヴィーノの意志が伺える。その後いくつかのカルヴィーノ作品において前面化する(4)，敢えて困難な分裂を生きようとする意志が，すでにこの短編において感得できよう。しかしながら，少年少女のすれ違いにある種の困難さが暗示されているとしても，掉尾のヒキガエルの親子（生殖＝再生）に新生＝再生への希望が託されていることも見逃してはなるまい。この作品を決して暗いものにしていない秘密がここにある。

「ある日の午後，アダムが」は，以上のように，当時共産党機関誌『ウニタ』のピエモンテ版文芸欄編集者として活躍していたカルヴィーノの文学が，けっして公式左翼の単純なレアリズモ文学に終わっていなかったことを如実に示す，きわめて興味深い作品に仕上がっている。寓話的な世界とレアリズモ世界の二重写しという手法もカルヴィーノの特徴をよく示しており，カルヴィーノの作家活動の最初期から寓話的手法が用いられていたことを示す証左としても貴重である。

カルヴィーノの作品の大半がすでに邦訳，紹介されているなかで，本作品を含む初期のいくつかの短編の邦訳，紹介が遅れている事態に鑑

み[5]，また本短編の重要性も考え，ここに訳出を試みる次第である。なお訳者は本作品について詳しく論じたイタリア語の論文[6]をすでに発表していることを付記しておく。

## 試訳

新しい庭師は髪の長い少年だった。長い髪を十字型のヘアバンドで留めている。片手に水のいっぱい入った如雨露をもち，もういっぽうの腕を突きだしてバランスをとりながら並木道をこちらに向かってくるところだった。まるでミルクコーヒーでも注ぐようにそっと金木犀に水をやる。金木犀の根本の地面には黒い染みが広がっていた。染みが大きく広がりびしゃびしゃになると如雨露を起こし，次の木へと移る。庭師ってきっと美しい職業だわ。最後まで静かに仕事ができるんだから。台所の窓からマリア＝ヌンツィアータは少年の姿を見ていた。背はもうずいぶん高かったが，まだ半ズボンを穿いていた。そのうえ髪が長いので女の子のように見える。マリア＝ヌンツィアータは食器を濯ぐ手を止め，窓ガラスを叩いた。

「ねえ，ちょっと」

少年庭師は頭を上げるとマリア＝ヌンツィアータを見て微笑んだ。マリア＝ヌンツィアータも笑い出した。少年にお返しをするためもあったが，こんなに髪が長く，しかもこんな十字のヘアバンドを被った少年なんか見たことがなかったからだ。すると少年庭師は手振りで「おいでおいで」をする。その格好があんまり可笑しいので，マリア＝ヌンツィアータはそのまま笑い続けた。そして彼女も身ぶり手振りで皿洗いがまだなことを伝えようとした。しかし少年庭師は片手で「おいでおいで」をしながら，片手でダリアの鉢を指さしている。なんでまたダリアの鉢なんか指しているのかしら？マリア＝ヌンツィアータは窓を開けると顔を突きだした。

「なあに？」と言って笑った。

「なあ，いいもの見せてやるよ」

「なによ？」

「いいものだって。見においでよ，早く。」

「なによそれって？」

「あげるからさ。いいものプレゼントするから。」

「食器洗わなくちゃ。それに奥さんが帰ってきて，あたしがいなかったら。」

「欲しいのかい，欲しくないのかい？ほら早く。」

「ちょっとそこで待ってて。」マリア＝ヌンツィアータはそういうと窓を閉めた。

勝手口から出ると少年庭師は同じ場所にいた。

金木犀に水をやっていた。

「こんにちは」とマリア＝ヌンツィアータ。

マリア＝ヌンツィアータの方が少しだけ上背があるように見えたが，それはコルク底の靴を履いているせいだった。すてきな靴で，仕事のときにも履くのはもったいなかったが，それほど気に入っていた。縮れた黒髪にちょこんと収まった顔は童顔で，脚もまだ痩せて子供っぽかったが，体の方は，前掛けの膨らみから感じられるように，すでに豊かで大人っぽかった。マリア＝ヌンツィアータはまだ笑っていた。何を耳にしても，何を口にしても可笑しい年頃だ。

「やあ」と少年庭師。顔も首も胸も茶色に焼けている。いつでもこうして半裸でいるからにちがいない。

「お名前は？」とマリア＝ヌンツィアータが尋ねた。

「リベレーゾです。」と少年庭師が答える。

マリア＝ヌンツィアータは笑って「リベレーゾ．．．リベレーゾ．．．変な名前ねえ，リベレーゾなんて」と繰り返した。

「エスペラントの名前だよ。エスペラントで自由ってことさ。」

「エスペラントねえ」とマリア＝ヌンツィアータが言う。「じゃあエスペラント人なの？あんた。」

「エスペラントは言葉だよ。」とリベレーゾが説明する。「親父がエスペラント語を喋るんだ。」

「あたしはカラーブリア出身。」とマリア＝ヌンツィアータ。

「名前は？」

「マリア＝ヌンツィアータです。」と言って笑っている。

「どうしていつまでも笑ってるの？」

「じゃああんたどうしてエスペラントって名前なのよ？」

「エスペラントじゃなくて，リベレーゾ。」

「なぜ？」

「じゃなんできみはマリア＝ヌンツィアータなわけ？」

「聖母マリアさまのお名前よ(7)。あたしの名前はマリアさまの名前から，弟の名前は聖ジュゼッペ〔ヨゼフ〕の名前から取ったの。」

「じゃあ，さんじゅぜっぺ，かい？」

マリア＝ヌンツィアータはぷっと噴き出した。「『さんじゅぜっぺ』！リベレーゾ，ジュゼッペよ，『さんじゅぜっぺ』じゃなくて。」

「うちは弟がジェルミナルで妹がオムニアってんだ。」とリベレーゾはいう。

「さっき言ってたものなに？」とマリア＝ヌンツィアータ。「見せて。」

「おいで。」リベレーゾはそう言って如雨露を置き，手を取った。

マリア＝ヌンツィアータは動こうとしない。「何だか先に言ってちょうだいよ。」

「来れば分かるって。でも，きちんと世話するって約束してくれ。」

「あたしにくれるの？」

「うん，プレゼント。」連れてきたのは庭の塀に近い一角だった。二人の背丈ほどあるダリアが鉢に植わっている。

「ここだ。」

「何？」

「ちょっと待って。」

マリア＝ヌンツィアータはリベレーゾの肩越しに覗き込んだ。リベレーゾはかがんで鉢を動かし，塀のそばにあるもうひとつの鉢を持ち上げて，地面を見せる。

「そこ，そこ。」

「何なの？」とマリア＝ヌンツィアータ。何も見えなかった。日陰の隅で，湿った葉と腐植土しかない。

「見ててごらん，動くから。」と少年はいった。すると葉のくっついた石のようなものが動いた。湿っていて眼と脚がある。ヒキガエルだ。

「きゃ！」

マリア＝ヌンツィアータは例のコルク底の靴で飛び退くとダリアの影に隠れた。リベレーゾはヒキガエルのそばにしゃがんで笑っている。茶色の顔のまんなかで歯が白く輝いていた。

「怖いの？ヒキガエルだよ。怖くないよ。」

「ヒキガエル！」マリア＝ヌンツィアータはいやそうにいった。

「ヒキガエルだよ。おいで。」とリベレーゾ。

マリア＝ヌンツィアータはヒキガエルを指さして「殺してよ」という。

少年はヒキガエルを守ろうとするように手を差し出し延べた。「やだよ。いいやつなのに。」

「いいヒキガエルなの？」

「ヒキガエルってのはみんないいやつなの。芋虫食べるんだから。」

「ああそう。」とはいったものの，マリア＝ヌンツィアータはそばに寄ろうとしない。

エプロンの襟を噛みながら，横目でおそるおそる見ている。

「見なよ，きれいだから。」リベレーゾはそう言って手を地面に近づけた。

マリア＝ヌンツィアータは近くに寄った。もう笑ってはいなかった。口を開けたままじっと見つめている。「だめっ，さわらないで！」

リベレーゾは，ヒキガエルの灰緑色の背中を一本指で撫でる。疣だらけのぬらぬらした背中だ。

「どうかしてるんじゃないの？ひりひりするし，手が腫れちゃうでしょ。」

少年は茶色の大きな手を見せた。黄色い胼胝だらの層が厚く覆っている。

「おれの手は何ともないよ。ほらすっごくきれいだろ。」

子猫のように首のところを掴むと，手のひら

の上にヒキガエルを置いた。マリア＝ヌンツィアータはエプロンの襟を噛み噛み近寄って，そばにしゃがんだ。

「うぇえ気持ち悪い。」

二人ともダリアの陰にしゃがみ込んでいた。マリア＝ヌンツィアータの薔薇色の膝がリベレーゾの擦り傷だらけの茶色の膝に触れている。リベレーゾは手のひらと甲でヒキガエルの背中を撫で，逃げようとするたびに掴まえ直す。

「きみも撫でごらん，マリア＝ヌンツィアータ。」

少女は手をエプロンの下に隠した。

「いやよ。」

「どうして？なんでやなんだよ。」

マリア＝ヌンツィアータは目を伏せると，またヒキガエルを見て，すぐに目を伏せた。

「いや。」

「君んだ。あげるよ。」とリベレーゾ。

マリア＝ヌンツィアータの眼にはいまや涙が浮かんでいた。プレゼントを断るのは悲しい。いままでだれもプレゼントなんかくれなかった。でもそれがヒキガエルとなるとやはり気持ちが悪い。

「ヒキガエル，もしよかったらお家に持ってっていいわよ。お友達になれるかもしれないし。」

「それはいやだ。」リベレーゾはヒキガエルを地面に置いた。ヒキガエルはたちまち逃げ出して草むらに隠れた。

「じゃあね，リベレーゾ。」

「ちょっと待って。」

「皿洗いお終りにしなくっちゃいけないの。庭に出てたら奥さんのご機嫌も損ねるし。」

「待ってよ。あげたいものがあるんだ。すんごくきれいなもの。ちょっと来て。」

マリア＝ヌンツィアータはリベレーゾの後について，砂利が敷き詰められた並木道を歩き始めた。リベレーゾは変わった少年だ。髪の毛は長いし，両手にヒキガエルを持っている。

「リベレーゾ，いくつ？」

「十五歳だよ。きみは？」

「十四歳。」

「もうなったの？これから？」

「お告げの祝日になるのよ。」

「それってもう終わったの？」

「なに，お告げの祝日がいつか知らないの？」

マリア＝ヌンツィアータはまた笑い出した。

「うん。」

「お告げの祝日はね，行列がある日。行列に行ったことないの？」

「ないよ，おれは。」

「あたしの田舎じゃとってもきれいな行列があるんだ。ここことは大違い。ベルガモットでいっぱいの畑があってね，ベルガモットしかないの。でね，仕事っていったら朝から晩までベルガモット拾うだけ。あたしたちの兄弟は男女まぜて十二人だったけどみんなベルガモットを拾ったよ。でもそのうち五人は子供のころ死んじゃったんだけどね，それからお母さんが破傷風になって，それから兄弟七人と一週間列車に乗ってカルメロ伯父さんところに行ってさ，八人一緒にガレージで寝たんだ。ねえ，どうして髪の毛そんなに長いの？」

二人はミズイモの花壇で立ち止まった。

「だってこうだからさ。きみだって長いじゃないか。」

「だってあたしは女の子だもん。髪の毛長かったら女の子みたいなのよ。」

「おれは女の子みたいじゃないよ。髪の毛じゃ男だか女だか分からないって。」

「どうして髪の毛じゃ分からないの？」

「だから髪の毛じゃわかんないだってばさ。」

「なんで髪の毛じゃ分からないのよ？」

「きれいなもの欲しい？」

「うん。」

リベレーゾはミズイモのあいだをあちこち歩き始めた。蕾は全開。ラッパのような白い花を空に向けている。リベレーゾはミズイモの花のなかをひとつひとつ覗き込んでは指を二本入れ，閉じた掌に何かを隠していった。マリア＝ヌンツィアータは花壇に入らなかった。リベレーゾを眼で追って，微笑んでいる。あの人いったい何してるのかしら？リベレーゾは花をすべて調

べ終わった。重ねた両手を前に突きだしてやってくる。

「手を広げて」。マリア＝ヌンツィアータは両手でお椀の形を作って差し出したが，少年の手の下に持って行くのは怖かった。

「なかになに入ってるの？」

「きれいなもの。いいかい。」

「まず見せて。」

リベレーゾは手を少し開いて見せた。ハナムグリがいっぱいだった。ありとあらゆる色のハナムグリがいる。いちばん綺麗なのは緑。それから赤みがかったのやら黒いのやら，濃青まであった。ぶんぶんと羽音を立て，別のハナムグリの堅い羽の上で滑り，ひっくり返っては黒い脚をばたつかせている。マリア＝ヌンツィアータは手を前掛けの下に隠した。

「ほら。」とリベレーゾはいう。「きらいなの？」

「好きだけど。」とマリア＝ヌンツィアータはいったが，手は相変わらず前掛けに隠したままだ。

「手で握るとくすぐったいよ。やってみない？」

マリア＝ヌンツィアータはおっかなびっくり手を差し出すと，リベレーゾはそこにいろんな色の虫を滝のように流し込んだ。

「怖くないよ。刺さないから。」

「やだあ！」刺すなんて考えてもいなかった。思わず手を広げると，自由になったハナムグリは羽を広げた。美しい色は消え去って黒いだけの大群になり，飛び立ってミズイモの花に帰ってゆく。

「もったいない。おれはプレゼントしたいのに，きみが欲しくないもんだから。」

「帰って食器洗わなくちゃ。奥さん，あたしがみつからないと叫ぶのよ。」

「プレゼントいらないのか？」

「なにくれるの？」

「おいで。」

また手を取って花壇のなかを引っ張ってゆく。

「すぐに台所に帰らなくちゃいけないのよ，リベレーゾ。それからめんどりの羽を毟んなくちゃ。」

「うへえ！」

「なんで，『うへえ』なの？」

「おれたち死んだ動物の肉は食わないんだ。」

「じゃいつも四旬節なのね？」

「なんだって？」

「なに食べてんのあんたたち？」

「たくさん食べるよ。アーティチョークだろ，レタスだろ，トマトだろ。親父は，死んだ動物の肉を喰うなっていうんだ。コーヒーと砂糖もだめだって。」

「配給の砂糖はどうるすの？」

「闇市で売っちゃう。」

二人は，あちこちに赤い花をつけたサボテンのような植物が何本も生えたところにやってきた。

「きれいな花」とマリア＝ヌンツィアータ。「ねえ，あたしに取ってくれる？」

「どうすんの？」

「マリア様に持ってゆくの。マリア様には花を持ってゆくものなのよ。」

「メセンブリアンテムム」

「ええ？」

「ラテン語でメセンブリアンテムムっていうんだ，この植物。花にはぜんぶラテン語の名前がついてるんだよ。」

「ミサもラテン語でやるわ。」

「へえ。」

リベレーゾは壁を這う枝を横目でじっと見ていた。

「ほら，あそこだ。」

「なにがあるの？」

ミドリトカゲだった。陽を浴びてじっとしている。緑の体に黒い模様。

「よし，つかまえるぞ。」

「やめてよ。」

しかしリベレーゾは手を広げてミドリトカゲにゆっくり近づいていった。そしてぱっと飛びつく。つかまえた。リベレーゾは満足そうに笑っている。褐色と白の笑みだ。「ほら，おれの手から逃げようとしてる！」ミドリトカゲは閉じ

た手からうろたえた頭を出したかと思うとこんどは尻尾を出す。マリア＝ヌンツィアータも笑っていたが，ミドリトカゲを眼にするたびに後ろに飛び退き，スカートの裾を膝の間にぎゅっと挟み込んだ。

「なんだ,やっぱりなんにも欲しくないんじゃないか。」いささか自尊心を傷つけられたリベレーゾはそういって，ミドリトカゲをそうっと石垣のうえに置いた。ミドリトカゲは矢のように逃げていった。マリア＝ヌンツィアータは眼を伏せたままだった。

「おいでよ。」リベレーゾはそういうと，彼女の手を取った。

「あたしはできれば口紅がいいな。日曜日，踊りにいくとき唇につけるやつ。それから，そのあとの聖体降福式で頭に被る黒いヴェール。」

「おれはさ，日曜日はさ，弟と森へいくんだ。んで，袋をふたつ松かさでいっぱいにする。それからとうちゃんがエリゼ・ルクリュ[8]の本を大きな声で読んでくれるんだ。とうちゃんは肩まで髪の毛が伸びて胸まで髭があるんだぞ。んで，夏でも冬でも靴下穿いてて。おれはさ，ファイ〔イタリア無政府主義連盟〕のウィンドウに飾るデッサン描いてるんだ。シルクハットをかぶってるのが銀行家。ケピ帽かぶってるのが将軍。丸い帽子が坊さん。それから水彩絵の具で色を塗るわけ。」

池があった。睡蓮の丸い葉が浮いていた。

「しーっ」

水の下では，緑色の肢をばたつかせてカエルが上がってくる。水面にまでやってくると，睡蓮の葉に跳び乗り，まんなかに停まった。

「よし。」リベレーゾはそういうと，カエルをつかまえようと手を伸ばす。ところがマリア＝ヌンツィアータが「ああ」と声を漏らしたために，カエルは水に飛び込んでしまった。

「あそこだ。」

水に片手を入れて，出したときには握っていた。「一石二鳥。みてごらん。いっぴきが上になって，もういっぴきが下になってるから。」

「なんで？」とマリア＝ヌンツィアータ。

「オスとメスがくっついてるんだよ。なにしてるかみてごらん」とリベレーゾ。

リベレーゾはカエルをマリア＝ヌンツィアータの手に載せようとした。マリア＝ヌンツィアータは怖かったが，カエルだから怖いのか，雄と雌がくっついているから怖いのか分からなかった。

「そっとしてやってよ。さわらないで。」

「オスとメス」とリベレーゾは繰り返した。「そうすると，オタマジャクシがうまれるんだ。」

太陽に雲がかかった。ふとマリア＝ヌンツィアータは気が滅入った。

「こんなに外にいちゃって。きっと奥さん探してるわ。」

しかし彼女は帰ろうとしなかった。相変わらず庭を歩き回っていた。陽はすっかり翳っている。ヘビの出番だ。竹の垣根の裏には小さなヘビやヘビトカゲがいた。リベレーゾは腕にヘビを巻きつかせると，その小さな頭を撫でた。

「むかしヘビを飼ってたことがあってさ，十ぴきくらいいたかな。長いのも短いのも。ミズヘビもいたな。でも脱皮してから逃げちゃった。ごらんよ。口が開くから。舌がふたつに割れてるんだ。撫でてごらん。噛まないから。」

しかしマリア＝ヌンツィアータはヘビも怖かった。そこでふたりは岩場の小さな貯水池に行った。リベレーゾは最初に勢いよく迸り出る水を見せてやり，蛇口を全部開けた。マリア＝ヌンツィアータはとても喜んだ。それから赤い魚を見せてやった。年取った孤独な魚で，鱗が白くなり始めている。マリア＝ヌンツィアータはその赤い魚が気に入った。リベレーゾは魚をつかまえようと水のなかで手を動かし始めたがなかなかうまくゆかない。でもマリア＝ヌンツィアータなら広口瓶に入れて台所まで持って行くことだってできる。リベレーゾは魚をつかまえたが，窒息しないよう水の外には出さなかった。

「下に手を当てて撫でてごらん。」とリベレーゾはいった。「呼吸してるのが分かるから。オ

ビレは紙みたいだし，ウロコはちくりとくるかもしれないけど，ちょっとだけだよ。」

しかしマリア＝ヌンツィアータは魚もさわりたくなかった。

ペチュニアの花壇には柔らかい腐植土があった。そこでリベレーゾは指で腐植土をほじると，えらく長くえらくぐにゃぐにゃのミミズを引っ張り出した。

マリア＝ヌンツィアータは小さく声をあげると逃げた。

「ここに手を置いてごらん。」とリベレーゾは古い桃の木の幹を指していった。わけが分からなかったがマリア＝ヌンツィアータは手を置いた。悲鳴を上げた。貯水池に飛んでいって手を水に浸す。うようよといる蟻を引っ張り上げてしまったのだ。桃の木は，いたるところでちっぽけな「アルゼンチン蟻」が往来していた。

「みててごらん。」とリベレーゾはいうと，幹に手を置いた。蟻が見る見る腕を昇ってゆくが，リベレーゾはじっとしたままだ。

「なんで。」とマリア＝ヌンツィアータはいった。「どうしてあんた蟻だらけになるわけ。」

手はもう真っ黒だ。蟻はもう手首まで昇っている。

「手を放しなさいよ。」とマリア＝ヌンツィアータ。「蟻がぜんぶあんたの上にのぼっちゃうじゃない。」

蟻は剥き出しの腕を昇り，すでに肘まで這い上がっていた。とこうするうちに腕ぜんたいがうようよと蠢く黒いヴェールで覆われる。そして蟻はついに腋の下まで到達したが，リベレーゾはいっこうに木から離れようとしなかった。

「早く。腕を水に入れて！」

リベレーゾは笑っている。首から顔に昇っている蟻さえいた。

「リベレーゾ！もう好きにしていいわ！プレゼントはみんなもらうから！」

マリア＝ヌンツィアータはリベレーゾの首に手を伸ばして蟻をはたき落とし始めた。

するとリベレーゾは褐色と白の笑みを湛えたまま木から手を離し，平然と腕を払った。しかし，平然としてなんかいないないことは一目瞭然だった。

「ではとっておきのプレゼントあげることにしよう。いちばんとっておきのやつだ。」

「なに？」

「ハリネズミ。」

「んもう．．．奥さんだ。呼んでる！」

マリア＝ヌンツィアータは食器を洗い終わった。と，窓ガラスに小石の当たる音がした。下にはリベレーゾがいた。大きな籠をもっている。

「マリア＝ヌンツィアータ，上にいっていいか。びっくりするようなもの見せてやるから。」

「上には来られないの。そのなかにはなにが入ってるの？」

しかしちょうどそのとき奥さんが呼び鈴を鳴らしたので，マリア＝ヌンツィアータは姿を消した。

台所にもどってみるとリベレーゾはいなかった。台所の中にも外にもいなかった。マリア＝ヌンツィアータは流しに近づいた。すると目に入ったのは，その「びっくりするようなもの」だった。

乾かすために置いておいた皿という皿でカエルが跳ね，シチューなべではヘビがとぐろを巻いている。スープ入れはミドリトカゲであふれかえり，クリスタルにはカタツムリが虹色の跡を残していた。水が張られた盥には年老いた孤独な赤い魚が泳いでいる。

マリア＝ヌンツィアータは一歩後ろにさがったが，見ると足の間にはヒキガエルがいた。大きなヒキガエルだった。いや雌のヒキガエルに違いない。なぜなら，後ろから小さな家族が五匹，列をなしてついてきていたからだ。白黒のタイルのうえをぴょんぴょん跳びながら前進しているところだった。

註

*）Un pomeriggio, Adamo, 1947.なお，底本として Italo Calvino, *Romanzi e Racconti*, Mondadori, Milano, 1991, pp.151－161を用いた。

1）同上

2）Italo Calvino, *Ultimo viene il corvo*, Einaudi, Torino, 1949.

3）Italo Calvino, *Racconti*, Einaudi, Torino, 1958.

4）この分裂の主題はとりわけ『まっぷたつの子爵』（*Il visconte dimmezzato*, 1952.）と『木のぼり男爵』（*Il barone rampante*, 1957.）によく表れている。

5）*Ultimo viene il corvo* および *Racconti* に収められた短編のうち一部はすでに邦訳があるが（『魔法の庭』〔和田忠彦訳，晶文社，1991年〕に収められた11編および『むずかしい愛』〔和田忠彦訳，ベネッセ，1991年〕に収められた10編），「ある日の午後，アダムが」を含むそれ以外の24編が未邦訳である。

6）Naoya Oagawa, "Toccate e fughe in *Un pomeriggio, Adamo* di Italo Calvino",『東西芸術研究』No.4, 東西芸術研究会, 2002, pp 1 －14.

7）マリア＝ヌンツィアータ Maria-nunziata は「お告げのマリア」という意味

8）Elisée Reclus（1830－1904）フランスの地理学者。無政府主義運動の大思想家。大学に属さず，単独で途方もない著作をものした。『世界地理』（*Géographie universelle*）19巻などがある。